

---

# YUMA (ゆーま) を目指して

沙 亜竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゆーま  
YUMAを目指して

### 【Nコード】

N9803X

### 【作者名】

沙 亜竜

### 【あらすじ】

大気汚染や水質汚濁の影響で住める土地が狭くなり、人々は空中に家を建てるようになった。そういった家々に手紙を届ける郵便配達員は、ホウキで空を飛ぶ魔法の仕事となっていた。風間夢愛はそんな郵便配達員に憧れる中学生の女の子。女子魔法部に所属する夢愛と友人の時時ほゆるは、配達員のスカウト実習に参加することになった。ファンタジー系魔法配達員見習いの成長記。

朝っ！

清々しい朝っ！

カーテンを勢いよく引き、まぶしく差し込む朝日を一身に浴びる。

うん、今日もいい天気っ！

カーテンを開けたわたしの目に飛び込んできたのは、まず青空。

そして家、家、家。

正面だけではなく下にも上にも、多くの家々が建ち並ぶ。

そう、上にも下にも。

歴史の教科書なんかだと、地上だけに狭苦しく家が並んでいるよ  
うな町並みしか見られないから、昔の人たちには信じられない光景  
なのかもしれないけど。

でも、わたしたちにとっては、ごく見慣れた光景。

窓から身乗り出して十メートルくらいは下にある道を見回すと、  
見慣れた光景の中に見慣れたふたりの人影を見つける。

「うわっ、来ちゃったよっ！ ふええ、もうこんな時間だったんだ  
っ！」

慌ただしく窓から離れ、すぐにパジャマから制服に着替える。

あっ、せめて髪くらいとかさないとっ！

でもあんまり時間もないし、とりあえず大急ぎでセットするしか  
ないわっ！

慌てながらカバンをつかんで部屋を飛び出すと、一気に階段を駆

け下りる。

そして玄関にカバンを置き、そのまま洗面所へと駆け込んだわたしは、鏡の前に立って素早く髪にクシを通していく。

こんなもんかな……、うん、よしっ！ 大丈夫っ！

起きるのがいつもギリギリなわたし。

朝ごはんを食べる時間がほとんどないのは、ごく日常のことだった。

それがわかっているお母さんは、素早く食べられる軽い朝ごはんを用意してくれる。

朝ごはんを食べないと頭が働かないから、なるべく食べていきなさいと、お母さんから毎朝のように言われている。

もちろん、もっとゆっくり食べる余裕を持って起きるようにしなさいよと、お小言もちょうだいしながら。

わたしはサンドイッチを頬ばり、ホットミルクをすすってのどに流し込む。

いくら急いでいても、パンをくわえながら家を飛び出したりはしない。お行儀悪いもんね。

……大急ぎでパンを流し込む今のわたしも、決してお行儀がいいとは言えないだろうけど。

ともかく、しっかりと全部飲み込んでから、わたしは席を立った。

「ごちそうさまっ！ 行ってきますっ！」

「もう、朝っぱらから忙しい子ねえ。はいはい、行ってらっしゃい」

文句の言葉を背に受けながら、わたしは玄関へと向かう。

そのまま玄関のエレベーターに乗り込み、地表へと下りていく。

エレベーターから降りると、目の前には、さつき部屋の窓から見えていたあのふたりが並んで待っていた。

「ごめん、お待たせっ！」

「ほんと待ったわよ！ 毎朝毎朝、どうしてこう人を待たせるかな、この子は！」

「ま、いいじゃないか。待つ時間も楽しめばさ」

両手を合わせて謝るわたしに、ふたりは対照的な言葉を向けてくる。

多少のいらつきを含んだ声を投げかけてきた女の子は、時時ときときほゆるちゃん。

小学校五年生からのつき合いだから、今年で四年目の友人だ。

クラスメイトとしても四年目になる彼女。思ったことを素直にぶつけてくれるのは心地よく感じる。

場合によってはちよつと、厳しいっていつか、悲しいっていつか、泣かされちゃうこともあるのだけど……。

ほゆるちゃんとは違って穏やかな口調で語りかけてくれたのは、水玉みずたま現くん。

現くんは、ほゆるちゃんの隣の家に住んでいる。いわゆる幼馴染みってやつね。

小五からほゆるちゃんと仲よしのわたしは、自然と現くんとも仲よくさせてもらっている。

ちよつとおとなしい、というより無気力と表現したほうがいい印象のある現くんは、背が低いのを少しだけ気にしている。

確かにほゆるちゃんと比べると、十センチ近く低いんだけど。

でもいいじゃん。わたしよりは高いわけだし。  
そりゃあわたしも、かなり小さいんだけどさ……。

それはともかく、待つ時間も楽しめばいいなんて、現くんはやっぱり優しいなっ！

思わず、にへらへらと緩みきつた顔をしていたのだろう、ほゆるちゃんがジト目でツッコミを入れてきた。

「またそんな、ポケポケ顔しちゃって。あんたってば、ほんとに成長しないわよね！」

そう言い放った彼女の視線はゆっくりと下がり、わたしの胸の辺りで止まる。

「この辺も……」

「う……うるさあ〜いっ！ まだ発展途上だもんっ！ お母さんみたいに控えめなところで止まったりしないんだもんっ！」

「あ〜……。おばさん、確かに小さいよね。なんだ、止まっちゃうのが目に見えてるじゃないの」

「失礼な〜！ 目に見えてないもんっ！」

「ふたりとも、充分失礼だよ、おばさんに……」

わたしとほゆるちゃんの言い争いに、現くんは落ち着いた声を挟む。

そして、

「ま、とにかくさ、そろそろ学校に向かわない？」

と続けた。



大気汚染とか水質汚濁とかの影響で、人が住める場所が極端に少なくなつてから久しい今の世の中。

人が住んでいるのは、大きな都市の近辺など、整備の行き届いた一部の地域だけとなっている。

もちろんそれは、わたしたちの住む日本だけじゃなく、世界中のどこでも同じ。

海は汚れ、大地は腐ってしまった。

地球規模の自然破壊。すべての生物にとっての危機。

その原因となつたのがわたしたち人間なのは、紛れもない事実だけど。

したたかな人間は、その危機をも乗り越え、こうしてのうのうと生き長らえている。

そりゃあそうだよな。いくら自分たちが原因だからって、じゃあ責任を取って絶滅します、なんてことを考えるわけがない。

どんな生物だって、生きること**に**必死なんだから。人間だって、例外じゃないのだ。

住む土地が少なくなつたなら、空に住めばいい。そう考え、家々は上空にも建てられるようになった。

家の重さに耐えられる頑丈な柱　家柱いえはしらを地表に立て、その上に家を建てる。家柱の中にはエレベーターが通っていて、それを使って地表とのあいだを行き来する。

それが、一般的な空中住宅だ。



頑丈な柱が必要だったり、強風に負けないよう家自体にも補強が必要だったりするから、地表に建てる家よりはお金もかかってしま  
うみたいだけど。

土地の値段がバカ高い昨今、比較してみれば空中住宅のほうがり  
ーズナブルと言える。

もちろん空中だからといって、勝手にどこにでも家が建てられる  
ってわけじゃないけど、それでも空中の値段のほうが、土地の値段  
と比べたら圧倒的に安い。

というわけで、町には空中住宅が多くなっている。

空中に住む人が多いと、当然ながら移動手段も空中を使いたいと  
ころだけど、そう簡単にはいかない。

実際、普通に道路を走る車以外に、魔力を使って空を飛べる車も  
あるにはある。だけど、とつても高価な上、免許の取得も難しい。  
もう少し簡単に扱える乗り物として、魔法のホウキもあるのだけ  
ど。

こちらもそれなりに値が張る上、やっぱり免許が必要となってい  
るため、なかなか簡単には乗れない。

そもそも、魔力を持っている人自体が少ないわけだし、そういつ  
た魔力が必要な移動手段なんて普通の人には使えないのが実情だっ  
たりするんだよね。

わたしは風間夢愛。  
かほまのゆあい

友達のほゆるちゃんや現くんと一緒に、我が校伝統の女子魔道部に所属する、ごくごく普通の中学二年生。

魔力を持つのは、古来より女性に多い。

そのため、女子魔道部は伝統となっている学校も多いのだ。

反対に男子魔道部がある学校は少ないのだけど。うちの学校にもないしね。

伝統となっている部のわりに、部員は少なく、二年生はわたしたち三人だけ。

一年生がふたり、そして三年生に至ってはたったひとりと、寂しいものだったりする。

それは、女子の入部が魔力保持者に限られているためだ。

魔道部の主な活動は、学校所有のホウキに乗って飛行演技をすること。だから、魔力がなくちゃ話にならない。

それじゃあ現くんはどうかというと、実は彼には魔力がない。現くんは、マネージャーだから、魔力がなくても問題ないのだ。

人数も少ないこんな部に、マネージャーなんて必要なのかな？と思わなくもない。だいたい、過去にマネージャーがいたことなんて、ほとんどなかったみたいだし。

でも現くんは、ほゆるちゃんが部長さんに強く推薦し、異例の抜擢と相成った。

わたしとしても、それは嬉しいことだったのだけど。

「ほゆる〜！ 夢愛ちゃん〜！ 頑張れ〜！」

両足を揃えてホウキに横座りし、校庭を地面すれすれで飛ぶ「走り込み」をしているわたしたちに、応援の声を向けてくれる現くん。

どうしてチアガールみたいなポンポンを持って、そんなにも嬉しそうに応援しているのかは、謎だけど。

というか、一年生のふたりや部長さんも同じように飛んでいるのに、わたしとほゆるちゃんだけを応援するなんて。

特例という感じで入部を許可されたわけだから、現くん以外にマネージャーはいない。

だから現くんは、みんなのマネージャーってことになるはずなのに。

もちろん、特別に扱ってもらえるのは嬉しいし、できたらほゆるちゃんとまとめてじゃなくて、わたしだけを特別に思っただけほしいのだけど……。

「ほゆる、やっぱり恥ずかしいよ。やめていいかな？」

「ダメよ！ チアガールの衣装を着るのは妥協してあげたんだから、しっかり応援しなさい！」

……あのポンポン、渡したのってほゆるちゃんだったんだ。

っていうか、現くんがチアガールの衣装まで着させるつもりだったの？

ほゆるちゃん……、恐ろしい子……。

だけど、

ちよつと見たかったかも……。

思わず想像して、顔を赤らめる。

そ、それはいいとしてっ！

やっぱりほゆるちゃんと現くんは、仲がいいんだなあ。

幼馴染みだもんね。わたしが入り込むすき間なんて、ふたりのあいだにはないんだ。

ちょっとブルーになっているわたしに、

「ほら、現が応援してるわよ？ 頑張って飛びな！」

ほゆるちゃんはそう言って笑顔を向けてくれた。

「みんな、お疲れ様〜！」

走り込みのあと、続けてスピード飛び、高飛びなどの練習をして、今日の部活動は終了となった。

わたしたちよりもひと足先にすべての練習をこなし、「待ち」に入っていた部長さんから労いの言葉がかかる。

女子魔道部の部長、くぬぎさやうえ 柵笹枝先輩はメガネで三つ編みの優等生。

進学希望の先輩はそろそろ受験勉強に入らなければならぬはずなのに、毎日部活に顔を出してわたしたちを指導してくれる。

伝統ある女子魔道部を本当に誇りに思っているらしく、わたしたちを立派に育ててからじゃなければ引退なんてできないと、口々に言っていたりする。

だからわたしたちは、頑張って早く一人前にならないと、先輩の進学の妨げになってしまうかもしれないのだ。

『お疲れ様〜！』

わたし以下、部員たち四名が声を揃えて答えると、すかさず現くんがタオルを持ってきてくれた。

ほゆるちゃんにタオルを渡したあと、現くんはわたしの目の前に立つ。

「はい、夢愛ちゃん。お疲れ様」

「あ……ありがとう、現くんっ！」

息は上がっていたけど、元気にタオルを受け取るわたし。その手が、なにやらふさふさした物体に触れた。

な……なんで現くんは、応援に使ってたポンポンをつけたままなの？

……気に入っちゃったのかな？

そんなわたしの疑問は、顔から溢れ出ていたみたいで。

「これはさ、ほゆるがきつく手に縛りつけちゃって、ほどけないんだよね。今タオルを渡したときにも引っ張られたから、余計にきつくなっちゃったし」

自嘲気味にそう答えてくれた。

「あははっ、そうなんだっ！ ……って、現くん大変っ！ 強く縛りすぎだよこれっ！ 手が紫色になっちゃってるよっ!？」

「あっ、ほんとだ……。ごめん、両手がこの状態だから、ほどいてくれる？」

「もちろんですよ！ まったくもう、ほゆるちゃってば、ひどいんだから……。あれっ？ こっちが、こっちなって、こっちが……」

わたしは紫色っぽくなっている現くんの両手を取り、巻きついているヒモをほどこうと躍起になっていたのだけだ。

「あれ、あれれ、あれれ？」

ヒモはどんどん絡まるばかり。

「あれえ〜っ？ こっちがこっちで、う〜んと、え〜っと……。どうしてえ〜!？」

「どうして〜は、こっちのセリフよ！ あんたはどこまで不器用な

「のよ！ ときなさい！」  
「はづっ！」

ほどこどころか、余計にひどくしてしまったわたしを突き飛ばすようにどかし、ほゆるちゃんが役目を引き継ぐ。

彼女がするするとヒモを引いたり巻いたりしていると、あつという間に現くんの両手は自由を取り戻していた。

「ふう、よかった。ちぎれちゃうかと思ったよ」

「あつづ、現くん、ほんとごめんねっ！」

情けなくてシユンとしながらも謝っていると、ほゆるちゃんがひと言。

「まったく。あたしがいなかったら、どうなってたことが」

……だつて。

ひどいよねえ？

現くんを最終的に助けたのは、確かにほゆるちゃんだけだ。

「あなたがそもそもの原因でしょう？」

うんうん、まったくもって、そのとおり。

と、わたしが思わず頷く言葉をほゆるちゃんに向けたのは、もちろん笹枝先輩だった。

落ち着いた雰囲気ながら、部長としての威厳からなのか、その声は鋭く響いてくるようにすら感じられた。

そんな笹枝先輩からのツッコミを、ほゆるちゃんはするりとかわす。

「確かに原因はあたしかもしれませんが、それをひどい状態にしたのは夢愛です。だいたい現だって、自分でどここうと思えばほどける状態だったと思いますよ?」

「なるほど。つまり自分は悪くない、と?」

ギリリ。

メガネの奥で笹枝先輩の目が光ったように見えたのは、はたしてわたしの気のせいだっただろうか。

「う……。すみません、イタズラ半分でした」

さすがのほゆるちゃんも、笹枝先輩には逆らえない。あっさりと頭を下げる。

「素直でよろしい」

それを受けて、笹枝先輩は満足そうに頷く。

ただ、ほゆるちゃんのほうは、

「……………なによ、……………のために、あたしがせつかく……………」

とかなんとか、ブツブツとつぶやきながら、なぜかわたしのほうに不満そうな視線を向けていた。

中庭の奥に建てられた部室棟。そこにある女子魔道部の部室に、練習を終えたわたしたちは戻ってきた。



まずはマネージャーである現くんにはホウキを渡し、女性陣が先に部室へと入る。

制服に着替えるためだ。

ホウキに乗って飛ぶときには、魔女服というのを着ている。

魔女服とはいっても、お話の中に出てくるような、黒い三角帽子とローブといった地味なものではない。

白を基調とした清潔感のあるワンピースタイプで、長いスカートがヒラヒラ感を演出する、優雅な雰囲気を持った衣装になっている。

魔道の飛行演技には、優雅さも求められるため、ゆったり飛ぶのが基本となっているのだ。

わたしたちが着替えているあいだ、部室の外にいる現くんには、魔法のホウキの汚れを落としたり毛並みを整えたりといった手入れをしてもらう。

マネージャーの仕事内容は、笹枝先輩が決めていた。

まず、部費で購入している学生用の魔法のホウキの手入れと管理。それと、わたしたちが着る魔女服、これも部費で購入したものだけど、その管理と洗濯もマネージャーの仕事となる。

全員が着替え終わると、笹枝先輩が現くんを呼ぶ。

現くんは魔法のホウキを部室に持ち込んで、ロッカーにしまう。

部室の中ではわたしたちが、脱いだばかりの魔女服を現くんに手渡ししていく。

それを外にある水飲み場まで行って洗ってくるのも、マネージャーである現くんの仕事だ。

冬場なんかはあまり汚れないから頻繁に洗ったりはしないけど、そろそろ夏も近いから、ここところ毎日洗ってもらっている。

……使っている本人が持ち帰って、家で洗ってくればいいのでは。

わたしはそう思ったのだけど、「マネージャーとしての仕事だから、現くんが全員の魔女服を手洗いするのよ」というのが笹枝先輩の主張だった。

もちろん部長命令は絶対だから、誰も逆らえない。

現くんが魔女服を洗って持ち帰ってくるまでのあいだ、残ったわたしたちは部室でお喋りタイムとなる。

「練習は終わってるんだから、帰ったっていいんじゃないですか？」

一年生からそんな声も上がったけど、笹枝先輩いわく、「マネージャーに洗濯させておいて帰るなんて、そんな薄情なマネはできないわ」とのこと。

……だったら洗濯を手伝ったらいいんじゃない、という言葉は呑み込んでおく。

だって絶対、「マネージャーの仕事なんだから、ひとりではらなきゃダメなのよ」とかって答えが返ってくるに決まってるし。

わたしたちがしばらくのあいだ他愛ないお喋りに花を咲かせていると、現くんが洗い終えた魔女服を持って帰ってきた。

それを部室の中に干して、今日の部活動は終了、解散となる。

部室にカギをかけ、それぞれの帰途に向かった。

わたしはいつも、家までほゆるちゃんと現くんのふたりと一緒に帰っている。

「また明日ねっ！」

家に着いたわたしは、家柱のエレベーター前でふたりと挨拶を交わす。

そして、並んで小さくなっていくふたつの背中を、じっと見送った。

毎日思っていることだけど、

ちよつと、寂しいな……。

夏も近づいているとはいえ、なんだか妙に涼しい夕方の風が、わたしの心のすき間をすり抜けていく。

ぶるる。

微かに体が震える。

気づけばもう、ふたりの姿は見えなくなっていた。

ふう……。

わたしはわずかにチクチクと痛む胸を押さえながら、エレベーターの上昇ボタンを押した。

七月に入って少し経つと、期末テストがある。テスト期間中は部活動が禁止となるため、わたしたちは放課後になつてすぐ、学校をあとにした。

本来ならまっすぐ帰ってテスト勉強をしなきゃいけないところだけど。

気分転換も兼ねてちよつと寄り道していこう、という話になり、よく足を運んでいる公園へと向かうことにした。

ベンチがいくつか設置されているだけで、他にはちよつとした植え込みや芝生がちらほらある程度の、なんだかとっても寂しい公園。せめて噴水とか花時計とかでもあればいいのに、と思ってしまうけど。

でもここは、わたしにとってはお気に入りの場所。訪れる人も少ないから、静かで落ち着ける憩いの場になっているのだ。

気持ちが沈んだりしたときにも、よくこの公園に来ていたっけ。公園自体が温かく、わたしを包み込んでくれるような、そんな気がするから。

ほゆるちゃんたちに出会ってから、それほど頻繁にっわけじゃないけど、何度も来ているこの場所。

毎回ふたりと一緒に楽しい時間を過ごす、くつろぎの空間。

最後に来たのは、二週間くらい前だったかな？

そんなことを考えているうちに、爽やかな緑色が目にも心にも優

しい公園の姿が目飛び込んでくる。

今日はやけに暑いから、途中でソフトクリームを買ってきてあった。

公園の中に足を踏み入れたわたしたちは、いつもどおり並んでベンチに腰をかけた。

このベンチに座るときの並び順は、わたしが真ん中で、ほゆるちゃん和現くんがその両隣、っていうのがお決まりのパターンになっている。

いつからそうなったのかは、ちょっと覚えていない。

確かふたりと知り合った当初は、ほゆるちゃんと現くんが隣り合っ  
って座っていたと思うのだけど……。

「それにしても、あつついわね、今日は！」

「ほんとだねっ！　アイスが美味しいよっ！」

ほゆるちゃんの大声に、わたしも負けじと明るい声を返す。

汗はただらと流れてしまうけど、その分ソフトクリームの冷たさが心地よくて、とっても美味しく味わうことができていたから。

「そうだね、やっぱり夏はアイスが一番だよね」

わたしの言葉に、現くんも頷いてくれる。

でも、ほゆるちゃんだけは、汗だけじゃなくなって文句もたららと垂れ流し続けていた。

「どうしてあんなたちはそう、ポジティブシンキングかなあ！　あ  
くもう、暑くてベトベトで気持ち悪い！　スカートがまとわりついて、鬱陶しいっ  
たらないわ！」

わーわーと喚きながら、ほゆるちゃんはスカートの裾を両手でつかみ、大きくあおぐようにして足に風を送っている。

「……ほゆるちゃん、お行儀悪いよお？　ってというか、パンツ見えちゃうっ！」

「うるさいわね！　そんなことより、汗でベタベタなほうが大問題なのよ！」

「ええっ？　パンツ見えちゃうほうが、問題だと思うけどなあ……」

「あたしはあんたと違って、汚くないから大丈夫なのよ！」

「わ……わたしだってべつに、汚くなんてないよおっ！」

「だったら現に確認してもらえば？」

「な……、どうして現くん！？　そんなの無理っ！」

わたしとほゆるちゃんが、こんなことを言い合っているあいだ、当の現くんは涼しい顔でソフトクリームを舐め続けていた。

……なんていうか、ちょっと恥ずかしいけど、こっぴつ話題なら男の子なんだし、少しくらい興味を持つてもいいんじゃない？

そりゃあ、あまり積極的に食いついてこられても、嫌ではあるのだけど……。

でも現くんは、まったく興味なしと言わんばかりの澄まし顔でソフトクリームに夢中の様子。クリーム部分は食べ終えて、パリパリと音を立てながら残りのコーンをたいらげているところだった。

ほゆるちゃんといつも一緒にいるけど、女の子として意識しているような感じでもないし……。

もしかして現くん、女の子に興味なかったりするのかな……？　ぼーっとしていたからか、わたしは手もとから溶けたソフトクリ

ームが垂れてきていることに、まったく気づかなかった。

「あっ！」

と思ったときにはもう遅い。

溶けたソフトクリームの雫は、コーンから指を伝って、そのまま制服のスカートに落ちる。

「大丈夫？」

すかさず現くんがハンカチを取り出すと、スカートに落ちたソフトクリームを拭き取ってくれた。

「すぐに拭かないと、シミが残っちゃうからね」

「あ……ありがとう」

至近距離に現くんの顔があって、わたしは赤くなりながらお礼を述べる。

そんな状態なのに現くんのほうは、微かに笑顔を浮かべながらも、やっぱり澄ました様子。

どう考えても、意識されてなさそうだなって感じは否めない。

もう少しこう、トキメキとかがあってもバチは当たらないと思うのだけ。

……ま、それも現くんらしいところだし、べつにいいけどさっ。

心の中で弁解(?)の言葉を叫び、わたしがひとり頬を赤く染めていた、そのとき。

「あっ、夢愛、見て！」

「ふえっ？」

不意にかけられた、ほゆるちゃんからの言葉に、わたしは首をかしげる。

「……上よ、上！」

「あつ、郵便屋さん！」

そう、わたしたちの目に飛びこんできたのは、優雅に空を舞う郵便屋さん　郵便配達員さんの姿だった。

郵便物の配達先となる家々は、空中住宅であることが圧倒的に多い。そのため、郵便局の配達員さんたちは、魔法のホウキに乗って空を飛ぶ。

だから女の子の憧れの職業なのだ。

もちろん魔力がないと務まらない上、人気も高いからそう簡単にはなれない。

だけど、カッコいいし綺麗だし、わたしたちみたいな魔道部に所属している子にとっては、目標ともいうべき存在だった。

「はう、やっぱりカッコいいよー！」

「そうね。優雅だし、今どき手紙を届けるってのも、夢があっついわよね！」

わたしとほゆるちゃんは両手を合わせ、上空を横切っていく郵便屋さんにキラキラした眼差しを送る。

そしてその姿が視界から消えるまで、憧れの吐息をこぼしながら見つめ続けていた。



テスト期間が終わると、部活動の禁止期間も終わる。というわけで、わたしたちは夏休み前の暑い中、練習を続けていた。

……ちなみに、テストの結果については聞かないでおいてもらいたい。

一応、赤点 補習の最強コンボは免れた、とだけ言っておくけど。わたしたち魔道部の女子は、みんな漏れなく郵便配達員に憧れている。

中学生を対象とした飛行演技の大会が毎年秋に催されるので、そのための練習も欠かさない。

そういった大会で目覚ましい活躍をした生徒が、郵便局のお偉いさんに目をつけられてスカウトされる、というケースもあるわけだから、必死になるのも当然と言えるだろう。

夏休み中の部活動は基本的に自由となっではいるけど、大会のある部活はみんな、毎日遅くまで活動するのが普通だった。

わたしたち女子魔道部もご多分に漏れず、毎年夏休みも活動する。しかも、休みに入る前と同じどころか、土日も含めて毎日の活動となるのだ。

「こらそこ！ 気合いが足りないぞー！」

「は……はいっ！」

笹枝先輩からの叱責を受けながら、必死に飛び続けるわたし。

七月も終わりが近くなってくると、ただじっとしているだけでも

汗が止め処なく流れ出る。ましてや魔力をコントロールしながら空を飛んでいたら、まさに滝のような汗と言っても過言ではないくらい。

でも、そんな汗をもある程度コントロールできるようにならないと、一人前の郵便配達員にはなれないらしい。

確かに、たとえ優雅な飛び方をしていても、汗だくだったら見ているほうも暑苦しく感じてしまうもんね。

実際には、真夏だと仕方がないと考えられている部分もあって、飛行演技の大会は秋頃に行われることが多いのだけだ。

とにかくわたしたちは、ひたすら魔法のホウキを操り、空を駆る。優雅な飛び方をしながらも、速さを兼ね備えるのが優秀とされているため、魔道部のメンバーはこつやつて日々練習に明け暮れるのだった。

「みんな、頑張れ！」

現くんがあんな必死に応援してくれるのは、大会とかそういうのとは関係ないと思うけど。

きつと、ほゆるちゃんか笹枝先輩から、「ごちゃごちゃと言われたんだろうな。」

しっかり応援しないと、チアガールの衣装が待ってるぞ、とか。

それはともかく。

「二年生のふたり！ 一年生の勢いに負けてる場合じゃないでしょ！ もっとしっかり飛びなさい！」

『はいっ！』

笹枝先輩からの怒声に、わたしとほゆるちゃんは素直に返事をす  
る。

もちろん、先輩の言うとおりだというのもあるのだけど。

笹枝先輩はただ怒鳴って先輩風を吹かせているわけじゃない。

わたしたちと一緒に空を飛びながら、なおかつ、わたした  
ち部員四人の練習をしっかりと見てくれているのだ。

先輩の実力は折り紙つきで、指摘も的確だから、反論する余地な  
んでない。だから一年生のふたりもわたしたち二年生も、笹枝先輩  
には絶大な信頼を置いていた。

笹枝先輩の実力がすごいという点については、のちのち語るとし  
て。

わたしたちは先輩の指導のもと、必死に頑張っている。

なかなか思うように大空を飛び回ったりはできないけど、どんど  
ん上達していることは実感できた。

「慣れればそれだけコントロールしやすくなる。それだけのことよ。  
要は本人のやる気次第なの」

笹枝先輩は謙遜してそう言うけど、彼女の教え方が上手いからと  
いう要因もあるのは間違いない。

「こら、足はちゃんと揃えなさい！ それから横乗りのときは、ホ  
ウキをぎゅっと握るんじゃないで、そつと手を添えるくらいにして  
おくこと！ そつじゃないと優雅さが半減しちゃうでしょ！？」  
「はい、わかりました！」

先輩の声が響くと、残りの四人の声も響く。

ギリギリとした強烈な日差しに照らされた校庭の上空で、わたしたちの練習は続いた。

わたしたちが飛んでいる下では、運動部の学生たちがそれぞれの練習を繰り返している。

魔女服は長いスカートになっていているわけだけど。横乗りで足を揃え、優雅に飛んでいけば、下着を見られたりなんてこともない。

もっとも、どの部活も大会とかに向けて練習中なのだから、ぼへーっと空を見上げているような余裕なんてないだろうけど。

ただ、たまに野球部のホームランボールなんか飛んでくるのは注意しなきゃいけない。

当たったら痛いだけじゃなくて、きつとそのまま校庭まで真逆さま。スカートがはだけてしまつとかそういうレベルではなく、下手をしたら骨折程度では済まないなんて事態も……。

空を飛ぶっていうのは危険と隣り合わせなのだということも、忘れてはいけない注意事項のひとつだった。

わたしとしては、できれば綺麗な景色をゆっくりと眺めながら、ゆつたりまったり空の散歩を楽しみたいな、なんて思っているのだけど。

飛行演技の大会とかだと、そうも言っていられない。

優雅さも評価のポイントではあるものの、あくまで飛行競争ってことになるのだから。

うん、頑張ろうっ！

「みんな〜！ ファイト〜！」

気合いを入れて飛んでいるわたしのもとに、ポンポンを振りながら応援する現くんの爽やかな声が届く。

普段はなんだか無気力な感じなのに、なぜかとってもノリノリで元気な現くんの声は、わたしの耳に心地よく響いていた。

暑さを振りまき続けていた太陽が徐々にその高度を下げ、赤味を帯び始めた頃、ようやく今日の練習は終わりを告げる。

いつもどおり部室に戻り、マネージャーの現くんが魔女服の洗濯を終えるのを待つあいだお喋りを楽しみ、現くんが帰ってくると今日の部活はお開きとなった。

と、いつもならさよならの挨拶をして、みんなそれぞれ帰っていくのだけど。

「あっ、そうだ。二年生の三人は、このあと少し残ってて。話があるの」

今日の笹枝先輩は、メガネの位置を直しながら、落ち着いた声でそう言った。

二年生の三人が残って、話をする笹枝先輩も残るとなると、すぐに帰れるのは一年生のふたりだけ。

というわけで、一年生のふたりが部室から出ていくのを見送ったあと、ドアを閉めた笹枝先輩は、わたしたち三人に向き直った。

「さて、あなたたちに伝えることがあるの」

そう切り出した先輩は、なんだかとっても嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「ええっ！？ 本当ですかっ！？」

笹枝先輩から伝えられた内容に、思わず声も裏返ってしまつくり、わたしのテンションは上がりまくった。

「ええ、本当よ。郵便局から、スカウト実習への参加願いが届いたの」

わたしたち女子魔道部の憧れ、郵便配達員はとても人気のある職業ではあるけど、魔力がないとなれない特殊な仕事。

だからこそ、学生のうちから目をつけておこうと、スカウト実習という制度を設けている。

うちの学校の女子魔道部は、長い歴史のある由緒正しい部ではあるけど、それでもスカウト実習の参加願いが来るのは、数年に一度あるかないかといった程度らしい。

スカウト実習は夏休み中の二週間で行われる。そして去年、笹枝先輩はそのスカウト実習を受け、見事合格した。

だからわたしは、先輩の実力は折り紙つきと言ったのだ。

最終的には進学を希望するってことで、卒業後の採用内定はお断りしていたけど。わたしとほゆるちゃんも去年その話を聞いて、なんでもつたいたいなことを、と憤慨したものだ。

でも、まさか二年連続でスカウト実習に参加できる部員が出るなんて。

スカウト実習の参加願いが来るのは、二年生に対してだけと決ま

っている。

一年生だとまだ経験不足だし、実習は夏休みに行われるため、三年生だと受験勉強で参加できない可能性もあるからとのこと。

実習の参加者は、実際に郵便局の人がお忍びで部活の様子を見学し、顧問の先生や部長さんからも話を聞いた上で決められるらしい。

だから、選ばれたのが誰なのかは決まっているも同然だった。

「よかったねっ、ほゆるちゃんっ！」

わたしはほゆるちゃんの手を取って自分のことのように喜んだ。

ほゆるちゃんの飛行技術は、友達のわたしから見てもすごいと思う。

それに比べてわたしのほうは、まだまだ基本もできていないくらいで、空を飛んでいてもバランスを崩すことが多い。

二年生の部員にはもうひとり、現くんもいるわけだけど。

魔力を持つのは女性が圧倒的に多いためか、郵便配達員は女性の仕事となっている。

だから男性である現くんにはスカウト実習の参加願いが来るはずはないのだ。

わたしが歓喜の声を上げながら、握ったほゆるちゃんの両手をブンブン振って喜びを表現する目の前で、彼女は戸惑ったような顔をしていた。

「な……なに言ってるのよ！ あんたかもしれないじゃないの！」

「えっっ？ そんなのありえないもんっ！ わたしって、ドジだしノロマだしっ！」

「……確かにドジでノロマだけど……それでも、可能性はあるじゃ

ない！」

……やっぱり、ドジでノロマだったのは否定されないんだ……。ちよつと悲しく思いつつも、わたしはすぐさま反論する。

「可能性なんてないよっ！ だって、ほゆるちゃんと比べたら、どう考えてもわたしのほうが劣るもんっ！ だから選ばれたのはほゆるちゃんて決まりっ！ ……ねっ、笹枝先輩、そうでしょ？」

わたしの言葉に、笹枝先輩は笑顔のまま答えてくれた。

「そうね。ほゆるさんには、スカウト実習に行ってもらっわ。もちろん、本人が拒否しなければだけど」

ほらやっぱり、ほゆるちゃんだ。

だけどちよつと、残念さで心がチクリと痛む。

「拒否なんてするわけないよっ！ ね？ ほゆるちゃんっ！」

まだ戸惑った表情を浮かべたままのほゆるちゃんに代わって、わたしが勢いよく答える。

でしゃばりかもしれないとは思ってたけど、断るなんてこと、あるはずないもん。

「もちろんよ！ あたしなんかでよければ、喜んでスカウト実習に参加させてもらいます！」

わたしの勢いにつられたのか、ほゆるちゃんは明るい声で、しっかり自分の口から先輩に向けて答えを返していた。



彼女は夏休み中に二週間、泊まり込みとかではないけど、土日を除いた平日には毎日郵便局に行って実習を受けることになる。

わたしはわたしで、夏休み中の部活を頑張ろう。

ちよっと離れてしまうけど、わたしはほゆるちゃんを一生懸命応援しようと、心に決めていた。

と、不意に笹枝先輩がわたしの方に顔を向けると、こう言った。

「それじゃあ、ふたりとも頑張つてね！」

……………えっ？

驚きで目が丸くなるわたし。

「どどどどどどど、どういうことですかっ！？」

思わずどもった声になりながらも、笹枝先輩に質問をぶつける。

「どういうこともなにも、聞いてのとおりよ？ 今年ほゆるさんと夢愛さん、ふたりの女子部員に、スカウト実習への参加願いが来たってこと」

「えええええええっ！？」

わたしはもう、なにがなんだかわからなくて、信じられない思いで頭の中がいっぱいになって、ほとんどパニック状態に陥ってしまった。

「異例のことではあるけど、そういうわけだから。我が部の恥にならないだろう、しっかりするのよ？」

『は……………はいっ！』

ほゆるちゃんとわたしの気合いを込めた声が、ピッタリと綺麗に重なった。

だけど驚きは、これだけには収まらず。

「というわけで、今年は合計三名の参加ってことになるわ」  
「……………えっ？」

今度は現くんも含めた三人の声が重なる。

「つまりね、現くんにもスカウト実習の参加願いが届いたってことよ」

「で…………でも、笹枝先輩！ 郵便配達員は女性の仕事ですし、だいたい現には魔力もないですよ！？」

さすがのほゆるちゃんも、さっきまでの戸惑いを通り越した驚愕の表情で、笹枝先輩に詰め寄っていた。

「そうね。でも、事実だから。ほら、これが参加願いの書面よ」

そう言いながらポケットから取り出した紙を広げる先輩。

『風間夢愛さん、時時ほゆるさん、水玉現さん、以上三名に、スカウト実習への参加をお願い致します。』

風間さんと時時さんはもちろん、郵便配達員としての実習、男性である水玉さんには、配達員のサポート係として、実習をお願い致します』

郵便局の印が押されたその紙には、そんな記述があった。

「そういうわけだから、三人とも、夏休み中の部活への参加は免除します。スカウト実習、頑張ってきてね！」

笹枝先輩のメガネ越しの瞳は、わたしたちの未来の姿を思い描いてくれているのか、ダイヤモンドのようにキラキラと光り輝いていた。

夏休みに入ったわたしたちは、スカウト実習のため郵便局へと来ていた。

郵便局の中へと通されたわたしたちには、それぞれ制服が渡され、早速更衣室に入って着替えた。

もちろん更衣室は男女で分かれているから、現くんは、わたしやほゆるちゃんと違う部屋だ。

局員の制服は男性と女性でデザインが違っていて、下も男性はズボン、女性は長いスカートとなっている。

白を基調としたカッコいい制服になっているのだけど。わたしとほゆるちゃんに渡されたのは、普通の制服とはちょっと違っていた。つまりは、わたしたちが憧れてやまない配達員専用の制服なのだ。

綺麗な白い色調なのは変わらないものの、より優雅さを強調するように、ゆったりとした曲線美をたえたデザインとなっている。

女子魔道部で使っている魔女服は、この配達員の制服をもとにデザインされたものだ。

これが本物……、なんて考えると、それだけで鼻血ものの興奮を覚える。

さらに配達員としての実習ということで、わたしとほゆるちゃんには魔法のホウキも渡された。

しっかりした作りで、毛先も綺麗に揃っている。柄の握り具合も初めて持ったのにピッタリとフィットする感じ。

部活で使っているホウキと比べると、ずっと高価なのが見るからにわかった。

配達員さんがホウキを新調するとき、それまで使っていたものを練習用として残しておくらしい。このホウキはそういった練習用のホウキだった。

わ……、このホウキ、実際に憧れの配達員さんが乗って、空を優雅に飛んでたんだあ……。

そんなふう考えたわたしは、思わずホウキにほつたをすりすりしたくなってしまったほど。

これからわたしたちは、このホウキに乗って大空を飛び回るんだ……。

両足を揃えてホウキに横座りし、白く清純な雰囲気衣装を身にまとい、長いスカートを風になびかせながら空を舞うその姿を想像するだけで、わたしの心はポカポカと温まっていくようだった。

いそいそと着替えを終え、準備を整えたわたしたち三人は、局長室へと通された。

そして今、こうして撫子さんから直々にお話を聞かせてもらっている。

「ようこそいらっしやいました。わたくしがこの郵便局の局長、紙かみ鳴峠なりとうげ撫子なでしこです。風間夢愛さん、時時ほゆるさん、水玉現さん、これから二週間、よろしく願います」

「は……はいっ！　ここここ、こちらこそ、よよよ、よろしく願いますっ！」

緊張でガチガチになりながら、わたしは局長さんに答える。

ああ、憧れの職場に、二週間だけの実習とはいえ、こうして立っているなんて。

そう考えただけで、わたしは天にも昇りそうな気分だった。

……実際、実習が始まったら魔法のホウキで大空へと昇ることに  
なるはずだけど。

「時々ほゆるです。よろしくお願いします」

「水玉現です。このたびは実習にお招きいただき、ありがとうございます」

わたしとは対照的に落ち着いた様子のふたりは、しっかりと名前を名乗りながら答えていた。

「あつ……、わたしは風間夢愛ですっ！」

慌てて名前を名乗るわたしだったけど、

「はい、わかっておりますよ。夢愛さんは少々、落ち着いたほうが  
よろしいかもしれませんね」

いきなりのお叱りを受けてしまった。

シユンとなつて頂垂れるわたしに、局長さんは笑顔を投げかけて  
くれた。

「ふふっ。そんなに硬くならなくてもいいですよ。あつ、それと、  
この郵便局での慣例となつておりますので、みなさんのことは、下  
の名前で呼ばせていただきますね。わたくしのことも、撫子と呼ん  
でください」

「は……はいっ、わかりました、撫子さんー！」

まだ緊張は完全に解けていなかったけど、わたしは撫子さんの名前を呼ぶことで、ちよっとは落ち着けたような気がした。

「みなさんには、これからの二週間、郵魔<sup>ゆうま</sup>の見習い<sup>みしゆ</sup>として活動していただきます」

『郵魔？』

撫子さんの言葉に、わたしたち三人が疑問符を重ねる。

「ええ。郵便配達員は魔女がその役割を務めるというのは、ご存知のとおりかと思います。ですから、郵便魔女さんを略して、郵魔なのですわ」

ぱーっと明るい笑顔を輝かせながら、説明を加えてくれる撫子さん。

「わたくしの提案で、今現在、強く推しておりますの。マスコットのYUMAちゃん人形も作っていただけられるようにお願いしている最中です。これがそのデザインですわ。とっても可愛らしいでしょう？」

撫子さんは自慢げに、紙に描かれた落書き（失礼）を見せつけてくる。

『は……はあ……』

わたしたち三人は、ただ曖昧に頷き返すことしかできなかった。

撫子さんはしばらくのあいだ、「郵魔」という名称やマスケットキヤラクターについて嬉しそうに語っていた。

でも、正直その呼び方は、まったく聞いたことがなかった。撫子さんが提案してからまだ日は浅いみただけど、それでも全然浸透していないのは明らかだ。

さすがにそれを指摘するのも悪いだろうから、三人とも黙ってはいたけど。

ともかく、思う存分「郵魔」に対する思いを吐き出したあと、撫子さんは小さく咳払いをし、気を取り直して真面目な口調で語り始めた。

「基本的な部分からお話しますので、退屈かもしれませんが聞いてください。

みなさんもご存知のとおり、大気汚染や水質汚濁によって、今の世界は人が住める場所が極端に限られてしまいました。

それを解決するため、人は大空へとその生活の舞台を広げていきました。

確かに住める場所は格段に増えましたが、その反面、利便性という点においては我慢を強いられています。

とはいえ、それも仕方のないことと、諦めるしかないのかもしれませんが。地球がこのようになってしまったのは、わたくしたち人類の責任なのですから。

ですが、人間として便利な生活を切望するのは、ごく自然な流れと言えるでしょう。

大空を自由に飛び回る。人類にとって、それは恋焦がれてきた長年の夢。



その夢に、人類はついに手を届かせました。

もつとも、郵魔の使う魔法のホウキや、魔力を使って空を飛べる車なんかはお金さえあれば買えるようになりましたが、そもそも魔力を持つている人自体が稀です。

ですからあなた方は、その稀な存在ということになりますわね。

でも、決して優れた存在というわけではありません。ごく普通の一般人です。それを忘れてはいけませんよ。

ただ、せつかく持って生まれた魔力なのでから、それを世の中の役に立てられるとしたら、とても素敵なことだと思いませんか？……現さんは魔力を持っておりませんが、もちろん劣っているわけではありません。だからこそこうして、実習への参加をお願いしたのですからね」

そこまで一気に話した撫子さんは、一旦間を置き、さらに言葉を続けた。

「昨今は夢のない時代と言われております。

大空へと手を伸ばしたとはいえ、数十年前に比べると住む地域は狭まり、人口の減少も留まることを知りません。

人類には未来なんてない。そういった絶望的な説を唱える人もいるくらいです。

ですが、本当にそうでしょうか？

未来は確かにないのかもしれませんが……多くの人が考えているように、本当に諦めてしまっただけです。

でも、諦めなければ、未来は必ず開けていくはずですよ。そう信じていることが、大切なのです。

わたくしはそう思っています。

未来を信じるために必要なのは、穏やかな心。純真無垢な子供のように、素直で穢れのない心なのです。

今どき流行らないかもしれませんが、手紙というのは本当に素晴

らしいものだと思います。

手紙にしたためた想いは、心を温めてくれる魔法のようなもの……。

そんな温かな魔法の詰まった手紙を通じて、たくさん人に夢をお届けする。それこそが、郵魔としての務めなのです」

わたしたち三人は声を挟むことなく、穏やかに語り続ける撫子さんの言葉を、心で受け止めていた。

憧れだけでここまで来てしまったけど、しっかりとした心構えを持って臨まなきゃ。

わたしは決意を新たにする。

「頑張ってくださいね、みなさん」

笑顔でエールを送ってくれる撫子さん。

続けてぼろっと、こんなことを口にした。

「……それにしても、スカウト実習は政府からも認められた制度ですが、お給料を払わずに実地訓練と称して仕事を手伝ってもらえますので、本当に助かるんですね」

……そういう本音は、隠したままにしてほしかったな……。

コンコン。

局長室のドアをノックする音が響く。

「はい、どうぞ」

「失礼します」

撫子さんの声を待つてドアが開かれ、ひとりの女性が部屋の中に入ってきた。

シャキッと背筋を伸ばし、配達員専用の制服をカッコよく着こなすその女性は、わたしたちにも一礼して撫子さんの隣に並ぶ。

「お待ちしていました。みなさんにご紹介します。彼女があなた方を指導してくれる、郵魔の折鶴おりつるおづが桜華さんです」

「よろしく」

桜華さんは見た目のクールな印象どおり、落ち着いた様子で軽く頭を下げる。

長い黒髪のポニーテールが彼女の動作に合わせて微かに揺れることすら、優雅に思えてしまう。

「入社三年目で、十八歳でしたかしら？ まだまだお肌もツルツルピチピチで、水はじきもよさそうで、うらやましい限りですわ」  
「……ピチピチなどと言うのは、おやめください」

ほんわかした雰囲気ふんいきの撫子さんとは対照的な桜華さんは、呆れ顔で言い返していた。

撫子さんはふわふわのシルバードロップを揺らめかせながら、絶

えず笑顔を浮かべているような感じだけど、年齢はちょっと想像がつかない。

ぱっと見だと二十代半ばくらいに思えるけど、局長という立場やさっきの発言内容から考えると、おそらく三十路を越えているに違いない。

それに対して桜華さんのほうは、落ち着いているからか、ぱっと見はやっぱり二十代半ばくらいに思えるのに、まだ十八歳だなんて雰囲気だけじゃなくて、実年齢も対照的なようだ。

……なんて口に出したりしたら、さすがの撫子さんでも雷を落とすかもしれないな。

「わたくしは今日、これからちょっと時間が取れませんので、あなた方の指導役は桜華さんに一任します。桜華さんの言うことを聞いて、しっかり実習プログラムをこなしてくださいね」

「はい、わかりましたっ！」

元氣よく返事をしたわたしは、桜華さんにも、

「よろしくお願ひします、桜華さんっ！」

と言って、深々と頭を下げた。

それに合わせて、ほゆるちゃんと現くんも同じように頭を下げる。

「ああ、よろしくな」

ニヤリ。

確かにクールで落ち着いた感じではあるのだけど。

桜華さんが微かにこぼした笑顔は、

なんとなく……、

わたしたちを小バカにしたような笑いのように、思えてしまった。

ああもう、わたしってば、どうしてそんなふうに思っちゃうのよっ！

これからの二週間、わたしたちを指導してくれる、憧れの郵便配達員さんだっていうのにつ！

「それではわたくしは仕事がありますので、お話はここまでということにしましょう。みなさんは桜華さんと一緒に庭に出てくださいね」

『はいっ！ これから二週間、よろしくお願いしますっ！』

はつきりと大きな声で答えるわたしたちに、撫子さんは優しい笑みを送ってくれる。

「ふふっ、やがてはこの郵便局で、ずっと長い時間と一緒にできるようになれたらいいですね」

そんな撫子さんの言葉をお土産にいただき、わたしたちは局長室をあとにした。

郵便局はそれほど広い敷地ではなかったけど、撫子さんが庭と呼んでいたように、建物の隣にちよっとだけ開けた場所があった。

朝にはそこで、局員全員参加の体操なんかも行われるらしい。

わたしたちが庭に向かったのは、最初の実習プログラム　飛行  
訓練をするためだった。

そして庭にたどり着いたわたしたちに向かって放たれたのは、指  
導役である桜華さんのこんな言葉だった。

「とうわけで、さっき紹介されたとおり、オレがおまえらを指導  
する折鶴桜華だ。言っておくが、ビシバシと厳しく指導していくか  
らな。覚悟しておけよ！」

そう言いながら、どこから持ち出してきたのか、竹刀を地面に勢  
いよく叩きつけると、バシーンと大きな音を響かせる。

……さっきは局長である撫子さんの前だったから抑えていただけ  
で、基本的にはこういう人なのね……。

自分のことを、「オレ」と言う桜華さん。

カッコいい印象なのは変わらないけど、思い描いていた彼女のイ  
メージとは百八十度変わってしまった気がする。

わたしが感じた小バカにしたような笑いは、隠しきれなかった本  
質的な部分がにじみ出ていたってことなのかもしれない。

なんだかこれからの二週間、前途多難って感じ……。

桜華さんの豹変ぶりに、さすがのほゆるちゃんも現くんも戸惑っ  
ていたけど、それでもやるしかないと言っているようだ。

そうそう、現くんもわたしたちと一緒に実習を受けているわけだ  
けど。でも彼は、魔法のホウキに乗って空を飛ぶことができない。

参加願いの手紙にあったとおり、現くんは配達員のサポート係と  
しての役目を求められている。だからてっきり、わたしたちとは別  
々に指導してもらおうのだと思っていた。

「だけど、どうやら現くんも一緒に、桜華さんのもとで実習を受けるみたい。」

「まずは飛行訓練からやるぞ。夢愛とほゆるは、真剣に飛べよ。手を抜いてるようだったら、容赦なく竹刀を振り下ろすからな！ それから現、おまえはそのあいだ、とりあえず自分の考えうる方法で彼女たちをサポートしてみろ！」

スカウト実習の最初のメニューは、桜華さんのそんな命令から始まった。

竹刀を振り回しながら、桜華さんが怒号を響かせる。

桜華さんのなにやら体育会系な指導のもと、わたしとほゆるちゃんにはホウキに乗って、郵便局の庭の上空を飛び回る。

そんなわたしたちに、現くんはちょっと恥ずかしがりながらも応援の声を送ってくれていた。

現くんはなんとというか、部活のときとあまり変わらない感じ。桜華さんが望んでいるのが、はたしてそういうことなのか、よくはわからないけど。

でも今のわたしには、そんなことを気にしている余裕なんて、まったくなかった。

必死に飛ばないと、容赦なく桜華さんの竹刀が襲いかかってくるから……。

こうして、スカウト実習という名のスパルタ訓練は、問答無用でスタートを切ってしまった。

ひとしきり庭での飛行訓練を続けたあと、わたしたちは実践的な訓練へと移ることになった。

実際に手紙を届ける、配達員としての仕事のお手伝いだ。

郵便局は各地の居住地域ごとに存在していて、配達する範囲はその地域だけ。

地域内の多くの場所に郵便ポストが設置しており、そこから回収された手紙が郵便局へと集まってくる。

回収の仕事は、ホウキに乗った郵便配達員ではなく、魔法の車を使う職員さんによって行われる。

地域内の郵便ポスト全部を巡って回収するため、ホウキでは運びきれないため、現在は車が使われているらしい。

魔法の車を運転するのにも魔力と免許が必要だから、専門の職員さんがいるのだけ。

一方、手紙などの配達に関しては、空中住宅も含めて入り組んだ場所なんかに届ける場合もあることから、車ではなく小回りの利くホウキが使われている。

それが、わたしたちの憧れている、郵便配達員さんの仕事だ。

……撫子さんが推していたわけだし、「郵魔」って呼んだほうがいいのか……。

でも浸透していない呼び名だから、いまいちピンと来ないけど……。

ともかく、そんなわけでわたしたちは、桜華さんと一緒にホウキ



で空を飛び、配達先の家まで届ける仕事のお手伝いをする事になった。

もちろん、現くんは飛べないので、お留守番。

といつても、別の実習が待っているようで、お仕事が一段落したのか庭に姿を現した撫子さんに連れられて、どこかへ行ってしまった。

やっぱり現くんだけ、別行動になるんだ。……ちょっと、残念。  
と、今はそんなこと、気にしてられない。  
わたしも気合いを入れて頑張らないとっ！

決意を胸に、ホウキに腰を下ろすと、青く澄み渡った真夏の天空へと飛び立つ。

そしてわたしは、すでに上空へと昇っていた桜華さんとほゆるちゃんのすぐ横に並んだ。

「よし、それじゃあ行くぞ！」  
『はいっ！』

わたしたちは桜華さんの号令に、声を揃えて大きく返事をする。  
お手伝いとはいえ、初めての郵便配達のお仕事に、これから向かうのだ。

テンションが上がって思わず笑顔がこぼれる。

ふと、ほゆるちゃんと目が合った。

彼女も、笑顔だ。

わたしたちは軽く頷き合い、先導して飛び始めた桜華さんの背中を追っていった。

郵便配達員さんは、ホウキの先に郵便袋をくくりつけて配達へと向かう。

その袋の中には、手紙などの郵便物が入っている。小包とか、ある程度以上のサイズのは、別途、魔法の車を使って配達されるのだけど。

「おまえらには、まだ袋を任せられないからな」

桜華さんはそう言いながら、郵便袋を自分のホウキにくくりつける。

そしてわたしたちには、配達先の住所がずらりと書かれた紙が渡された。

「今日の配達先のリストだ。上から順番に届けていけば最短ルートになるよう、コンピューターで計算されている。基本的には、この順番どおりに配達していけばいい」

「はいっ！」

渡された紙には、たくさんの住所が羅列してあった。三十ヶ所以上はあるだろうか。

わ〜……、一日にこんなにたくさん、届けなくちゃならないんだ……。  
と、思っていたら、

「今日はちょっと少なめだからな、おまえらがいて配達効率が悪くても、とくに問題はないだろう」

桜華さんは容赦なく、そう言い放った。

「それでも、少ないなんて……。」

それにしても、いくら事実とはいえ、そんなふうには言わなくてもいいような……。」

ちよつと不満を顔に浮かべてしまう。

「ほら、最初の家への手紙だ。夢愛、おまえが持て。言っておくが、落として紛失なんかしたら、罰則ものだからな」

そんなわたしに、桜華さんは郵便袋から封筒を取り出すと、なんとそのまま投げつけてきた。

「わわっ！」

わたしは思わず焦った声を漏らしながら、必死にその封筒を両手でつかもつとする。

どうにか落とさずには済んだけど、ホウキから両手とも離してしまい、バランスを失ったわたし。

封筒どころか、自分自身をも落としてしまいそうになった。

「ふう……。」

どうにか体勢を立て直し、冷や汗を垂らしながらも、安堵の息をつく。

「油断は禁物だぞ。事故が起こっても、こちらは責任を持ってないからな」

冷たく言い放ち、桜華さんは速度を落とすことなく、配達先に向かって飛び続ける。

「……夢愛、大丈夫？」

「うん……」

ほゆるちゃんが心配して手を差し伸べてくれた。

「ありがとう」

彼女の肩を借り、腰の位置を戻してホウキを安定させると、小さくなり始めている桜華さんの背中を再び追いかけた。

それにしても、ちょっと厳しすぎるよ……。

こんな状態で二週間も頑張っていけるのかな……。

わたしはちょっと弱気になりかけていた。

郵便局の配達地域は、かなり広い。

その地域をいくつか区切り、分けられた範囲を、それぞれの配達員が担当する。

配達員の人数は少ないから、それなりに広い地域を担当することになるのだけど。

ただ、配達する地域が決まっていて、また、憧れの職業で注目を受けることも多いためか、配達地域の人たちには顔を覚えられているようだ。

「あっ、配達員さん、こんにちは〜！」

といった感じで気軽に声をかける人も少なくない。  
入り組んだ空中住宅のあいだを飛んでいると、洗濯物を干している主婦の方や、ベランダから外を眺めている子供たちと視線が合ったりすることも多いのだ。

現にわたしも今まで、配達員さんを見かけると必ず、笑顔で「頑張ってください」と声をかけていた。

そうやって声をかけると、わたしの家の近くを担当する配達員さんは明るく、「ありがとう」と答えてくれたりするのだけだ。

桜華さんは澄ました顔で、軽く会釈するだけだった。

そりゃあ、愛嬌を振りまく必要はないかもしれないけど、もうちょっと親しみを持てるような対応をしてもいいんじゃないかな……。

「こんにちはっ！」

桜華さんの対応にちよつと不満を抱いたわたしは、声をかけてくれた人に元気な声で答える。

するとその人は、笑顔になってくれた。つられてわたしの心も温まり、自然と笑みがこぼれる。

でも、その人が見えなくなった途端、

「余計なことはするな。仕事に集中しろ。へらへら笑っていても、仕事は進まないぞ」

前を飛ぶ桜華さんから冷たい言葉がぶつけられてしまった。

そのあとも、わたしたちは桜華さんからの厳しい言葉を受けながら、「配達のお手伝いを続けた。」

三十ヶ所以上の配達場所を回り、さすがにクタクタになっていたわたしたちに、桜華さんからの労いの言葉なんて、もちろんあるはずもなかった。

「今日の実習はこれで終わりだ。明日は飛行訓練なしで、すぐに配達へと向かうぞ。遅刻なんてもつてのほかだからな」

一方的に言い残すと、桜華さんは郵便局の建物内へと戻っていった。

庭に取り残されたわたしたちのもとへ、着替え終えた現くんが駆け寄ってくる。現くんのほうは、わたしたちより早めに実習が終わっていたようだ。

「ふう……。それじゃ、あたしたちもさっさと着替えて、帰りましようか」

ほゆるちゃんの疲れきった声に、わたしは黙って頷いた。

「ほんっと、なんなのよ、あの人！」

真っ先に怒鳴り声を発したのは、ほゆるちゃんだった。

着替えを終え、ホウキも返したわたしたちは、郵便局を出て帰路へと就いた。

もしホウキを持っていたとしても、免許がないわたしたちには、勝手に乗ることは許されない。

だから、歩いて帰る以外に手段はなかった。

もちろん、自分のホウキなんて学生の身分で持てるはずもないのだけ。

歩いて帰るには結構な距離があったけど、わたしたちは黙ったまま歩き続けていた。

その途中で、ふと思立ったわたしたちは、学校帰りによく寄っているこの公園へと足を運んだ。

いつものベンチに座り、ほっとひと息ついたところで、さっきの彼女の怒りを含んだ言葉は吐き出されたのだ。

ずっと心の中でくすぶり続けていたのだろう、ほゆるちゃんは頭から湯気を立ち昇らさんばかりの勢이었다。

彼女の気持ちもわかるけど。

でも、わたしはもうちょっとだけ冷静に考えていた。

配達中の様子まで知っているはずはないけど、冷静なのは現くんも同じだったようで、

「まあまあ、落ち着いて、ほゆる。そんなに、ひどかったの？」

穏やかな口調で、ほゆるちゃんに声をかけた。

「そうなのよ！ 聞いてよ、現！ あの桜華って人ったらね」

現くんから促され、彼女は配達中の出来事を詳しく話して聞かせ

た。

わたしもそれを黙って聞く。

怒りで勢いに任せた感じだったから、事実をねじ曲げて伝えたりしたらいけないと、わたしはそう考えて見ていたのだけど。

ほゆるちゃんは怒っていても、しっかりとした状況説明ができていた。

さすがだな。わたしも見習わないと。

それに彼女は、桜華さんの冷たい態度なんかにも怒ってはいたけど、話を聞いていると、どうもわたしに対して厳しい言葉をぶつけてきたのを怒っているみたいに思えた。

実際のところ、飛行技術でもほゆるちゃんより遥かに劣るわたしだから、桜華さんからの怒鳴り声を食らう回数も多かったってだけのだけど。

ほゆるちゃんは、桜華さんがおとなしくて組み敷きやすいわたしにばかりキツく当たっていると考えて、憤慨しているようだった。友達として、わたしを心配してくれているのだ。そう思うと心の中が温かくなってくる。

「だいたい夢愛は、あまり強く言い過ぎると沈みまくって大変なことになるんだから！ 立ち直らせるために苦労することこの身にもなれってのよ！」

……あれ？ なんだかちょっと、心配の方向性が間違ってきてない？

「あゝ、確かにそうだよね」



「うわっ、現くんまでっ！」

そりゃあわたしは確かに、嫌なことなんかがあるとしばらく気持ちが悪く沈んだままになっちゃって、ふたりにも迷惑かけたことが今までにも何度かはあったけど。

そのたびに、この公園に来て沈んでいるわたしを、ほゆるちゃんと現くんが慰めてくれたのも、一度や二度じゃないけど。

……なるほど、考えてみたらわたしは、ふたりにずっと助けられて生きてきたんだな……。

「それはほんとに感謝してるけどっ！」

突然叫び出したわたしに、ふたりは目を丸くする。

あ……。

わたしの頭の中では話がつながっていたけど、実際にはちょっとずれた方向に進んでいたわけだから、驚かれるのも無理はないよね。けどふたりとも、すぐにわたしの考えを汲み取ってくれたらしい。

「……うん、いいのよ。……それで？ 続けていいわよ」

ほゆるちゃんは優しく笑顔を向けてくれる。

反対側からわたしの顔をのぞき込んでいた現くんも同じように微笑みを浮かべながら、話を聞いてくれる体勢になっていた。

「あ……うん。あのね、確かにちょっと、ひどい言われ方とかもしてたけど、でもそれって、わたしたちのためを思って言ってくれてるんだよっ！」

素直に思っていることを口にするわたしの声に、ふたりとも黙って耳を傾けてくれた。

「指導する立場にあるんだから、甘やかしてもダメだって考えて、あえてキツく当たってるんだと思うの。きつと桜華さんだって、そんな嫌われ役みたいなこと、やりたくないはずだよっ！」  
「うん」

ほゆるちゃんが軽く相づちを打つ。

「だからね、桜華さんのこと、そんなに悪く言っちゃダメだと思うのっ！」

「はい、よく言えました！」

わたしが言いたいことを喋り終えるやいなや、ほゆるちゃんはわしやわしやとわたしの頭を撫で回しながら、小さな子供を褒める母親のような言葉を放つ。

「わわわっ！」

頭を撫でる力が強すぎて、わたしは首がぐるんぐるん回って、焦った声を漏らしてしまっただけ。

っていかほゆるちゃん、わたしのこと、ちょっとバカにしてない!?

なんて考えたのは、もちろん間違いだった。

「あなたの言いたいことはわかった。そうね、きつとそうだと思うわ。反発する心も原動力になったりするかもしれないけど、それよりもちゃんと信頼することのほうが大事よね」

ほゆるちゃん言葉に、現くんも小さく頷く。

「うん、ぼくもそう思うよ。……ま、こっちは撫子さんの手伝いで感じて、優しく丁寧にいろいろと教えてもらえたけど」

ただ、続けられた言葉にほゆるちゃんは、

「な……、なんでそっちは厳しい実習じゃないのよ!?　なんか、不公平だわ!」

なにやら違った方向に食いついて、またもや怒鳴り声を上げ始めた。

うん、ほゆるちゃんはやっぱり、こっじゃないとねっ!

ちよっと失礼かもしれない感想を抱きながら、わたしは明日からも続くスカウト実習を一生懸命頑張ろうと心に誓うのだった。

次の日も、実習の続くわたしたちはもちろん、郵便局へと向かった。

昨日桜華さんが言っていたとおり、今日は最初から配達へと出かけることになった。

「頑張ってきてね」

撫子さんの横に並んで立ち、応援しながら送り出してくれる現くんを残し、わたしとほゆるちゃんは桜華さんのあとに続いて飛び立った。

いいな、現くんは。今日も優しく丁寧に撫子さんから指導を受けるんだろうなあ。

思わず恨みがましい考えまで浮かんでしまう。

わたしたちは昨日と変わらず、厳しい声をぶつけられながらも、配達をこなしていった。

昨日渡されたリストにあった住所は三十ヶ所くらいだったけど、今日渡されたリストには、その倍以上の住所が書かれてあった。

桜華さんから聞いてはいたけど、ほんとに昨日は少なかったんだ……。

「おい、夢愛！ ぼさつとするな！ 飛び方が崩れてるぞ！」

「は……はいっ！」

気を抜くとついつい考え込んでしまうわたしは、何度も桜華さんからの叱責を受けていた。

郵便配達員は、優雅に空を飛ぶ姿が特徴となっている。だからこそ、いつでも気を緩めず、美しいスタイルで飛び続ける必要があった。

仕事の効率から考えると、見た目なんか気にしないで、がむしやらに飛んだほうがいいような気もするけど。

でも、それじゃダメなのだ。

優雅さを失わず、なおかつ迅速に。

求められる飛行技術は、やっぱり高いレベル。

わたしなんかには、とうてい務まる仕事ではないのかもしれない。だけど、こうしてスカウト実習にまで参加できているのだから、ここは踏んばらないとっ！

ふと見ると、ほゆるちゃんが、大丈夫？ といったような目を向けてくれていた。

うん、大丈夫っ。

わたしは軽く笑顔を返し、彼女に頷いてみせた。

必死に頑張っているわたしではあったけど。

飛行技術の劣るわたしには、何度も何度も桜華さんからの怒声が飛んできた。

それはもう、集中砲火と言っても過言ではないくらいに。

「こら、夢愛！ 遅れてるぞ！ ボサツとするな！」

「足が開いてる！ パンツ見られたいのか、バカタレ！」

「ふらふら飛ぶんじゃない！ まっすぐ前を見て飛べ！」

「汗が汚らしいぞ！ 素早くハンカチかタオルで拭くようにしろ！」

「息が荒すぎる！ ある程度は仕方がないが、そんなんじゃ、とうてい優雅とは言えないだろうが！」

「夢愛！ 眉間にシワを寄せるな！ 苦しくてもそれを感じさせるんじゃない！」

「足をゆらゆらさせるな！ だらしない！ しっかりと揃えて固定しておけ！」

「髪もボサボサでみつともない！ 風になびく印象は大事だが、そこまでいくと鳥の巣としか思えないぞ！」

次から次へと繰り出される叱責の声。

わたしはそれを懸命に受け止めて、歯を食いしばっていた。

桜華さんは、わたしのために言ってくれてるんだ。

今はまだ実習を受けているだけの、単なるお手伝いでしかないけど。

いずれは一人前の配達員になれるように、頑張らなきゃっ！

そう思って、涙がこぼれ落ちそうになるのをどうにか堪え、ホウキを操る。

ほゆるちゃんはわたしを心配しているようだったけど、それでも昨日語った決意を理解しているからだろう、なにも言わずに様子を見守ってくれていた。

だけど桜華さんからの怒鳴り声は容赦なく続く。

「おい、早くしろ！ 次に行くぞ！ …… ったく、ほんとに下口いなおまえは！」

「ひっつ……、っ……ごめんなさいっ……！」

なんだか、単に悪口を言われていじめられているような感覚に陥ってしまう。

でも、負けないっ！

わたしは気合いを入れ直し、遅れないように飛び、必死に追いつがる。

そんな様子を見ても、桜華さんの態度は当然ながら変わることもなく、

「表情が硬すぎる！ 風を気持ちよく全身で受け止め、清々しい気持ちで飛べ！ まったく……。少しは自分なりに考える！ このウスノ口が！」

わたしはひたすら、厳しい声を浴びせかけられ続けていた。

配達する手紙も倍増した今日、急がないと配達しきれなくなってしまう。

わたしとほゆるちゃんがいることで遅れてしまうのは、ある程度仕方がないのかもしれないけど。

主にわたしのせいで、思ったよりも時間がかかっていた。

でも、息が上がってしまい、どうしようもない。

桜華さんからの叱責の声に答えることもできず、ただ必死に食らいついていくだけ。

もう優雅さのカケラもない状態だった。

自分の体力のなさを実感する。

魔道部で何本も「走り込み」をする意味が、やっとわかったような気がした。

と、そんなわたしの様子を見るに見かねたのだろう、今まで黙っていたほゆるちゃんが、桜華さんに抗議の言葉をぶつける。

「ちょっと、桜華さん！ 夢愛はもう限界です！ 急がなきゃいけないのはわかりますけど、少し休憩させてください！」

ほゆるちゃんも汗が溢れ出してきてつらそうではあったけど、それでもまだ飛び続けられそうに思えた。

つまり彼女は、わたしのために、そう言ってくれたのだ。

気持ちは嬉しいけど、でもわたしのためにこれ以上遅れてしまうのは、とっても心苦しい。

いいよ、ほゆるちゃん。わたし、頑張るからっ。



そう伝えたかったのだけど、意思に反してわたしの口からは声がこぼれ出すことはなかった。

疲れのせいで声にすらならなかったのだ。

わたしの気持ちはわかってきてくれているはずだけど……。

それでもほゆるちゃんは、桜華さんへの抗議をやめはしなかった。

「こんな状態で飛び続けたりしたら、倒れてしまつて余計に時間をロスすることになりますよ!? 五分でも十分でもいいですから、休ませてやってください!」

必死の説得。

今までの桜華さんの様子から考えると、それでもピシヤリと訴えを退けて、仕事を続けるだろう。

わたしはそう思っていた。

でも。

「……わかった。ちょうど下に公園があるようだし、あそこで休むとするか」

意外にも素直に、ほゆるちゃんの提案は受け入れられた。

わたしたちが降り立った公園。

そこは、昨日も立ち寄った、いつもわたしたちが足を運んでいる公園だった。

もちろん、いつもとはメンバーが違っていて、現くんの代わりに桜華さんがいるわけだけど。

それでも公園は、わたしたちを温かく迎え入れてくれているように思えた。

「あ……あの……、すみません、わたしの、せいで……」

ベンチに座ったわたしは、まだ少し息を切らしたままの声を伴って頭を下げる。

「……倒れられても困る。それだけだ」

桜華さんはそう答えると、ベンチから立ち上がる。

「仕方がないから、飲みものくらいおごってやる。汗をかいてるからな、スポーツドリンクにするぞ。いいな？」

「あ、はいっ！」

口調は今までと変わらないけど、初めて触れる桜華さんの優しさを感じ、わたしは疲れなんて吹き飛んでしまうように思えた。

やがて三本のペットボトルを持って戻ってきた桜華さんは、わたしたちに一本ずつそれを手渡す。

もちろん桜華さんも、残った一本のスポーツドリンクを飲み始めた。

「いただきますっ」

お礼を述べて、わたしもスポーツドリンクをのどに流し込んだ。冷たさが、のどを伝って全身に広がっていく。

高鳴っていた鼓動が落ち着いてきても、日陰になっているとはいえず暑い真夏の気温で、汗は止め処なく流れ出てくる。

それでも一瞬の清涼感に、これ以上ないほどの心地よさをプレゼントされたように思えた。

「あつ、ゆうびん屋さんのお姉ちゃんだ！」

不意に、明るい声が響き渡る。

五歳くらいだろうか、可愛いらしい女の子が、顔を上げたわたしたちの目の前に立っていた。

彼女はひまわりのような笑顔を咲かせながら、キラキラ輝く瞳をこちらに向けている。

「わたしね、大きくなったら、ゆうびん屋さんになるの！ だってだって、おようぶくが、とってもかわいいんだもん！」

女の子は元気いっぱい、自分の夢を語る。

そんな彼女の夢を壊しちゃいけないとは思ったのだけど。

ただわたしは、ウソをつくものいけないかな、と考えて素直に答えていた。

「うん、可愛いよね、この制服っ！ でもね、わたしとこっちのほゆるちゃんは、お手伝いしてるだけで、今はまだ郵便屋さんじゃないのよ。がっかりさせちゃって、ごめんなさいね」

そう言いながらも、やっぱり余計なことだったかなと、ちょっと

後悔の念が湧き上がる。

わたしの言葉を聞いて、女の子は一瞬キョトンとした表情になったけど。

すぐに満面の笑顔に戻る。

「お手伝いさんでも、ゆうびん屋さんだよ！ だって、まだ、ってことは、そのうちなるんでしょう？ それにさっき、ホウキでとんできたの、わたし見てたの！ カッコよかったよ！ わたしも早くゆうびん屋さんになって、お空をとびたいの〜！」

元気で素直で、まつすくな瞳。

そんな彼女を見てみると、見ず知らずのこの子の夢のためにも、わたしは頑張って一人前の郵便配達員にならなきゃ、って気になってくる。

「大丈夫、あなたなら絶対になれるよっ！ お空を飛べるようになるっ！ そしたらわたしと一緒に、お空を飛ばうねっ！」

「うんっ！」

わたしが笑顔を向けて女の子の頭を撫でると、彼女はよりいっそう輝いた笑顔で応えてくれた。

「……まだ実習を受けている身分で、随分と偉そうなことをほざいてたもんだな。ま、せいぜい頑張れよ」

女の子と別れ、休憩も終えたわたしたちが空に戻ったあと、桜華

さんからは嫌味な言葉をぶつけられることになってしまった。

でも、わたしは負けない。

小さい頃、わたしもさっきの女の子みたいに、純粹な瞳で郵便配達員に憧れていたんだもん。

だから、わたしだって「ゆうびん屋さん」になれる。

そして将来は、あの子と一緒に大空を飛び回るんだ。

新たな決意を胸に空を飛ぶ今のわたしには、弱音や気の迷いなんてひとカケラたりとも残っていないかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9803x/>

---

YUMA（ゆーま）を目指して

2011年10月28日02時06分発行